

アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

# Extreme

[エクストリームプレス]  
ご自由にお持ちください。

PRESS by AJPS

世界体操 東京2011

プレビュー

「美を捉える」



3

Vol. 3  
2011. Autumn

無料



アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

[エクストリームプレス] 2011. Autumn

Vol. 3



内村航平 [KONAMI]

Kohei UCHIMURA

表紙撮影/竹内里摩子 Rimako Takeuchi

どこでシャッターをきっても、惜いほどに乱れない男が日本に居る。体操日本代表、内村航平。「力強く且つ、美しい体操」この言葉は、彼の演技によって具現化され、より確実なものになっていくのだと感じる。終りの見えないこの勢いから、目が離せない。

■撮影日:2011年7月2日 ■場所:東京体育館(東京)  
■カメラ:Nikon D3s ■レンズ:Nikkor 400mm F2.8G VR  
■撮影モード:マニュアル 1/1000 F2.8 ISO 3200 ■WB:3850K  
■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード

## CONTENTS

### 「美を捉える」

2-3 卷頭エッセイ Vol.3 「究極の美しさ」

山崎浩子 Hiroko Yamasaki

撮影/竹内里摩子 Rimako Takeuchi

### Moments



山室光史 [KONAMI]

Koji YAMAMURO

撮影/北村大樹 Daiju Kitamura



田中和仁 [德州会体操クラブ]

Kazuhito TANAKA

撮影/竹内里摩子 Rimako Takeuchi



鶴見虹子 [朝日生命]

Koko TSURUMI

撮影/北村大樹 Daiju Kitamura



新竹優子 [羽衣国際大学]

Yuko SHINTAKE

撮影/北村大樹 Daiju Kitamura



田中理恵 [日本体育大学大学院]

Rie TANAKA

撮影/築田 純 Jun Tsukita



小林研也 [KONAMI]

Kenya KOBAYASHI

撮影/山田高央 Takao Yamada

### Close Up

12-14 「金メダリスト、塚原親子50年の挑戦」

文/小野哲史 Tetsushi Ono

撮影/荒川雅臣 Masaomi Arakawa

### Impression

15 「抜群の書き込み速度は、表現の幅を広げる!」

「サンディスク エクストリームプロ CFカード」を選ぶ理由

写真と文/竹内里摩子 Rimako Takeuchi

## 「究極の美しさ」 山崎浩子

美しいものは、世の中にあふれかえっている。美しい女性たち、クールな男性たち、ファッショナブルな服に、煌びやかなアクセサリー…。

だが、『心が打ち震えるような美しさ』には、そうそうお目にかかれないのである。

皮膚がざわめき、身体の奥底から熱がわき上がる。そんな、痺れるような感動を与えてくれる“美”。時が経っても決して記憶が薄れることはなく、そればかりか時間が経てば経つほど、そのときの感動を鮮明に思い起こすことのできる“美”。

遭遇した“美”は、観たものの人生をも変えてしまうほどである。

なにゆえ、その“美”に心を動かされるのか。それは、突きつめられた、極められた美しさだからだ。

長い年月をかけて磨き上げられた技、様、心。己と闘い、身を削り、葛藤し、多くの涙と喜びとともに手に入れたもの。妥協を許さず、こだわりにこだわり抜いて手に入れたもの。

だからこそ、簡単に手に入れたものではないからこそ、目に見えるもの以外の何かを、人は感じることができるのである。

根底からにじみ出てくる魂、人生。“究極の美”だからこそ、人は突き動かされるのだ。

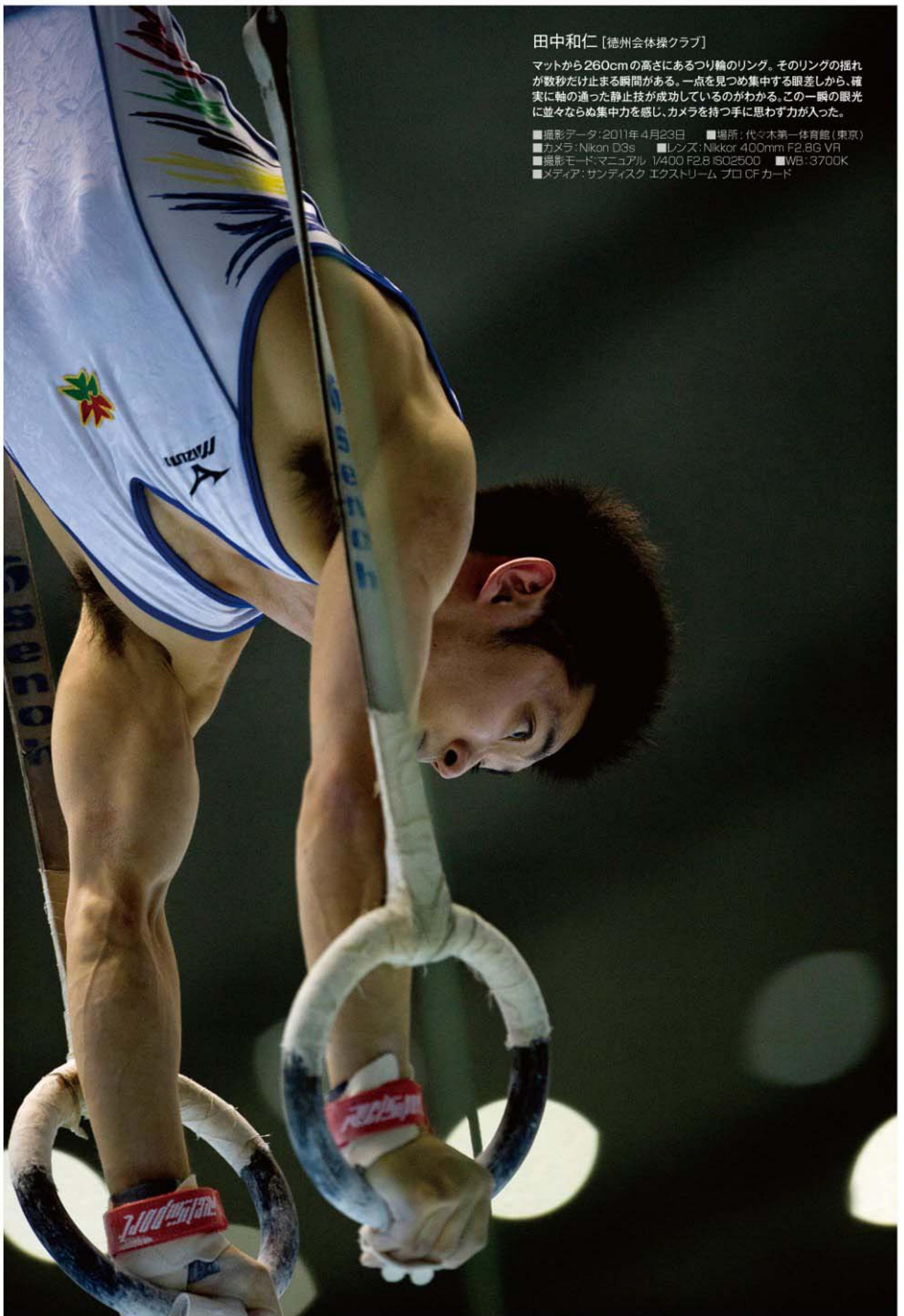




山室光史 [KONAMI]

跳馬に着手する瞬間。隆起する三角筋から上腕二頭筋。  
体操に求められる最適な筋肉を、体操で創り上げていく山室光史は、  
無駄のない究極の機能美を備えたアスリートである。

■撮影データ: 2010年10月21日 ■場所: ロッテルダム(オランダ)  
■カメラ: Canon EOS-1D Mark IV ■レンズ: EF400mm F2.8L IS  
■撮影モード: マニュアル V1250 F2.8 ISO1600 ■WB: マニュアル  
■メディア: サンディスク エクストリーム プロ CFカード



田中和仁 [德州会体操クラブ]

マットから260cmの高さにあるつり輪のリング。そのリングの揺れが数秒だけ止まる瞬間がある。一点を見つめ集中する眼差しから、確実に軸の通った静止技が成功しているのがわかる。この一瞬の眼光に並々ならぬ集中力を感じ、カメラを持つ手に思わず力が入った。

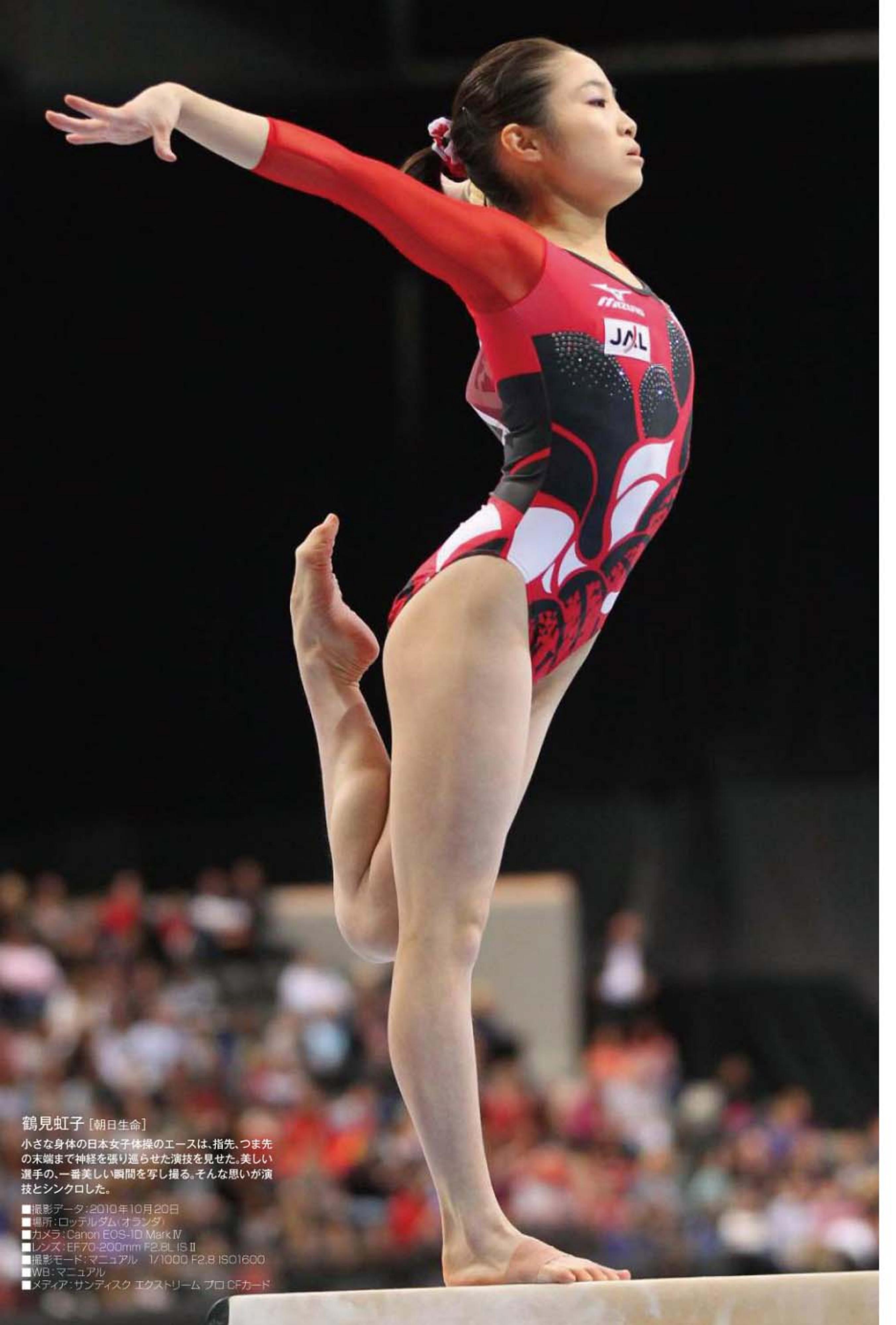
■撮影データ:2011年4月23日 ■場所:代々木第一体育館(東京)  
■カメラ:Nikon D3s ■レンズ:Nikkor 400mm F2.8G VR  
■撮影モード:マニュアル 1/400 F2.8 ISO2500 ■WB:3700K  
■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード



小林研也 [KONAMI]

幅135cmの器具の上の孤独な種目。腕で支えられ、空中に放たれた脚は、美しく、俊敏に、休むことなく技をこなす。その芸術性と選手が浮き立つ背景を探してチャンスを待つ。一瞬、二本の脚がそろって舞い上がった。心がシャッターを押した。そんな感覚が指先に残った。

■撮影データ:2011年6月12日 ■場所:代々木第一体育館(東京)  
■カメラ:Nikon D3s ■レンズ:AF-S Nikkor 70-200mm F2.8 G VR II  
■撮影モード:マニュアル 1/800 F2.8 ISO4000 ■WB:3700K  
■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード



鶴見虹子【朝日生命】

小さな身体の日本女子体操のエースは、指先、つま先の末端まで神経を張り巡らせた演技を見せた。美しい選手の一一番美しい瞬間を写し撮る。そんな思いが演技とシンクロした。

■撮影データ:2010年10月20日  
■場所:ロッテルダム(オランダ)  
■カメラ:Canon EOS-1D Mark IV  
■レンズ:EF70-200mm F2.8L IS II  
■撮影モード:マニュアル 1/1000 F2.8 ISO1600  
■WB:マニュアル  
■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード



田中理恵【日本体育大学大学院】

エレガントで誰からも愛される体操選手。その華麗な演技とトレードマークである愛くるしい笑顔は観客のみならず、カメラマンをも魅了する。“フォトジェニック”と言う表現が似合う競技者である。

■撮影データ:2011年4月23日  
■場所:代々木第一体育館(東京)  
■カメラ:Nikon D3s  
■レンズ:AF-S Nikkor 300mm F2.8G VR II  
■撮影モード:マニュアル 1/800 F2.8 ISO4000  
■WB:オート  
■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード



新竹優子【羽衣国際大学】

丹下健三氏の代表作、大きな吊屋根の照明を見上げ、カメラを観く。設計者が描いた曲線の中で彼女は舞う。平均台からヒラリ。  
なぜそんな高く舞い上がるのか？足元も見ずに、また10cmの幅に着台。恐怖心はないのか？ほらまたヒラリ。

■撮影データ:2011年6月11日 ■場所:代々木第一体育館(東京) ■カメラ:Canon EOS-1D Mark IV ■レンズ:EF16-35mm F2.8L II  
■撮影モード:マニュアル 1/1000 F2.8 ISO 3200 ■WB:マニュアル ■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード

Senoh



# 技へのこだわり—金メダリスト

## 技を究める—

塚原光男にとって、体操はオリンピックのためではなかった。

1960年代から70年代にかけて、世界をリードしてきた“体操ニッポン”。オリンピック史に燐然と輝く団体総合5連覇の中で、'68年メキシコ大会からミュンヘン、モントリオールと3大会に出場した光男は、金メダル5個を含む計9個のメダルを日本にもたらした。引退後も日本女子代表チームのコーチとして、'84年ロサンゼルス大会から3大会に連続出場。2004年アテネ大会では男子チームの総監督を務め、団体で28年ぶりとなる金メダルを獲得している。

競技と出会って半世紀、これまで選手、指導者と立場を変えながら、実に40年以上もの長きに渡り、最高峰の舞台に身を置いてきた。そ

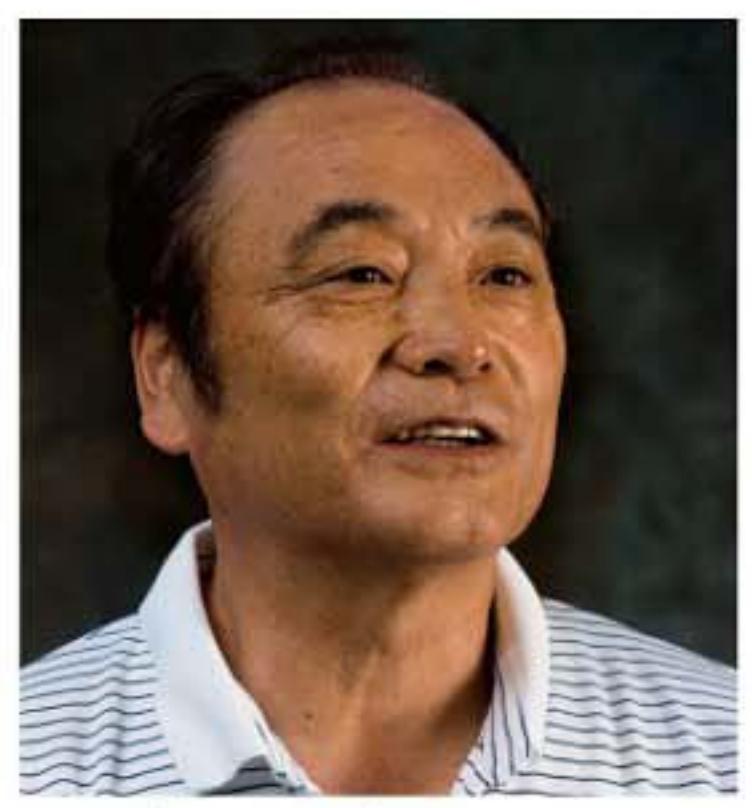
の光男がいとも平然と「オリンピックのために体操をやってきたわけではない」と言うのだ。

「ただ体操が好きで、目の前にある目標に対し

て挑戦する。競技を始めた13歳から、その繰り返しでした。体操の醍醐味は新しい技に挑戦し、それを発表することなんです」

世界に衝撃を与えた跳馬の「ツカハラ跳び」も鉄棒の「月面宙返り」も、光男のそうした想いから誕生したオリジナル技だった。もちろん、完成に至らなかった技も無数にある。幾度となく怪我もした。しかし、それを苦痛とか難儀だとは少しも感じなかった。誰もいなくなった体育馆で深夜に1人、新技の開発にのめり込む日々は、むしろ充実感に溢れていた。「できた、できなかったと、来る日も来る日もやるわけです。完成すれば感動するし、そこからまた次の技の挑戦が始まる。そんな毎日が楽しかった」と、光男は懐かしそうに当時を振り返る。

「ツカハラ跳びも月面宙返りも、たまたま世界で僕しかやらなくて、それが金メダルになっただけ」という言葉には、大いなる謙遜が込められている。一つ確かなのは、光男のオリン



塚原光男[つかはら みつお]

1947年生まれ 東京都出身 日本体育大学卒業  
オリンピック体操団体5連覇の歴史の中で、1968年メキシコ、1972年ミュンヘン、1976年モントリオールの3大会で団体金メダル。ミュンヘン、モントリオールでは種目別の鉄棒でも金メダルと活躍。1983年世界選手権より1992年バルセロナオリンピックまで日本代表女子チームコーチを歴任。2004年アテネ、2008年北京オリンピック体操総監督。2005年から3大会世界選手権体操チーム団長。現在、朝日生命体操クラブ総監督、(財)日本体操協会副会長。来年のロンドンオリンピック日本チーム総監督に就任。

徹底的に鍛え上げ、高校2年からはアンドリアノフコーチのもとで、一つ一つの技を磨いた。その間、光男はアドバイスを求められれば、親身になって協力したが、指導はその時々のコーチに全面的に任せ、仮に言いたいことがあっても、ぐっと堪えて我慢しながら温かく見守ってきた。その適度な距離感は、直也に必要以上に重圧を感じさせることなく、伸び伸びと競技に打ち込める効果を生んだ。

とくにアンドリアノフコーチになってから直也の技術レベルは、右肩上がりで向上した。高校2年と3年時には、父の足跡をなぞる

(左)モントリオールの金メダル、(右)デザインが一新されたアテネの金メダル 撮影/荒川雅臣  
■撮影日:2011年8月26日 ■場所:朝日生命体育馆(東京) ■カメラ:Nikon D3  
■レンズ:AF-S Nikkor 24-70mm F2.8G ED ■撮影モード:マニュアル 1/125 F8 ISO200 ■WB:マニュアル  
■メディア:サンディスク エクストリーム IV CFカード

ピックや金メダルが、目指していた終着点ではなかったことである。新しい技を自分のものにしたい——。その純粋な気持ちこそが、栄光への原動力となったのだった。

## スポーツ少年誕生—

塚原直也は、体操を本格的に始めた頃から、すでにオリンピックを意識していた。

ただ、幼少の時期から体操演技の毎日を送ってきたわけではない。体操で一時代を築いた父を持ち、母・千恵子も体操でメキシコ大会に出場したオリンピアンである。さぞや密度の濃い英才教育を施されたと思われがちだが、実際はそんなことはまったくなかった。'76年モントリオール大会の翌年に生まれた長男に対し、光男が望んだのは、一般家庭の父親とさほど変わらない、ごくごく普通のことだった。元気でスポーツが好きなら十分。できれば、素直な子になってほしいという願いから『直也』と名付けた。

野球をやりたいと言えば、バットとグローブを買いや、ゴルフをやってみたいと言えば、クラブを買ってきていた。体操を強制したことは一度もなく、直也が興味を持ったことなら何でもやらせた。「一人っ子だったからね」と笑うその表情

ピックを現地で観戦する機会に恵まれた。次元の違う技を次々と繰り出すトップレベルの選手たちを目の当たりにし、「自分は今後、こういうことをやっていかないといけないんだ」と漠然と感じたものの、決心が揺らぐことはなかった。

'77年生まれの直也は、オリンピックで活躍する父の姿をリアルタイムで見たことはない。金メダルを見せてもらったことも、当時の話を直接聞いたこともなかった。それでも、どこからか漏れ伝わってくる情報から、父の偉しさには気づいていた。

「多少のプレッシャーはあったかもしれません。でも、体操をやらなきゃいけない、頑張らなきゃいけないというような感じはなかったです。それまでと同じように自分がやりたいから始めただけでした」

直也、11歳。トップアスリートの船出としては決して早くない。しかし、自らの意志でオリンピックロードを歩み始めた。

## 外国人コーチの指導—

息子がオリンピックを目指したいと申し出たとき、光男は父親として嬉しくなかったはずはない。「大変だけど、頑張れよ」と気分よく背



5連覇を達成したモントリオールオリンピック団体の表彰台で  
(左から)加藤澤男、藤本俊、塚原光男 撮影/山田真市

# 塚原親子、50年の挑戦—

●文  
小野哲史  
●撮影  
荒川雅臣

からは、当時の光男が子煩惱な父親だったであろうことが容易に想像できる。

そんな環境で健やかに育った直也は、幼稚園の頃からサッカーに熱中していく。「体操はすべてのスポーツの原点」という光男の考えもあり、直也によれば遊び感覚で、週2回の体操教室に通い、基礎的な運動を学んだが、メインはあくまでもサッカーだった。しかし、熱は次第に冷めていく。

「サッカークラブが弱く、全然勝てないのがつまらなくて。団体競技は、たとえ自分が頑張っても結果に反映されないことが、子供ながらに納得できませんでした。逆に個人競技の体操はもうろに自分に返ってくる。その方が自分に合っているのかなと」

小学5年のとき、本格的に体操をやろうと決めた。同時に「オリンピックに出てメダルを獲りたい」という思いも芽生えた。その年の秋、直也は父がコーチとして参加するソウルオリン

中を押した。だが、そこで自身が指導しようとは思えなかったと言う。

「当時、強かったのはソ連と中国。基本技術もトレーニングプログラムも日本とは量や質が全然違うんです。あのとき、日本式の体操を続けていても、そこそこの選手にしかならない。世界を目指すのであれば、ソ連や中国の体操を学んでほしかった」

そんな矢先、光男が「人と良い出逢いが重なった」と語る偶然の巡り合いが、その願いを実現に導いていく。一人は中国代表の補欠にもなったことのある具傑、もう一人はミュンヘン、モントリオール、モスクワのオリンピック3大会に出場し、7個の金メダルを獲得した'70年代を代表する名選手、ソ連のニコライ・アンドリアノフである。2人はそれぞれの事情で来日したが、結果的に直也にとって不可欠の指導者になっていった。

直也は、具コーチのもとで約5年間、筋力を



塚原直也[つかはら なおや]  
1977年生まれ 東京都出身 明治大学卒業  
1996年から2000年まで全日本選手権大会個人総合5連覇を達成。1996年アトランタ大会、2000年シドニー大会、2004年アテネ大会までオリンピック3大会連続出場。アテネ大会で28年ぶりとなる団体金メダル。2003年、2006年の世界選手権で団体銅メダル。2009年よりオーストラリアに体操の場を求め、その年から全豪選手権の個人総合で3連覇中。



上／アテネオリンピック団体優勝、左から鹿島丈博・富田洋之・米田 功・中野大輔・塚原直也・水島寿恵  
右／団体優勝を喜ぶ光男氏 撮影／岸本 勉(上、右)

ようにインターハイの個人総合で2連覇を達成。国内の同世代にライバルはおらず、'96年には全日本選手権の個人総合でも初優勝を飾る。以降、全日本選手権は5連覇まで記録を伸ばし、光男の優勝回数2回を上回るまでの選手に成長した。さらに世界選手権の個人総合でも'97年に3位、'99年に2位と実績を残し、直也は日本体操界のエースに上り詰めていった。

## 28年ぶりの団体「金」——

'96年のアトランタ大会。直也は19歳にして念願のオリンピック出場を果たす。本格的に競技を始めて7年でたどり着いた夢舞台だった。しかし、現地で過ごした数日間は「上の空で、普段やっていることがまったくできませんでした」と、初出場のオリンピックは苦い記憶となっている。

「4年前とは違う緊張感があった」と語る2000年シドニー大会では、団体で4位に食い込んだ。まさかの10位に終わったアトランタ大会からは復讐の兆しを見せた日本男子体操陣だったが、メダル獲得という目標には届かなかった。個人総合でも2大会に出場した直也は



撮影／荒川雅臣

た」と言う。

「メダルを獲ることがどんなに大変かわかつていて、いざ獲れてしまったらどうリアクションをしていいかわからなかった」

日本がオリンピック男子体操団体で28年ぶりにつかんだ金メダルは、そんな微笑ましいエピソードとともにもらされた、塚原家にとって6個目となる金メダルだったのだ。



## 新たなるステージ——

あれから7年——。競技を始めたときからオリンピックを意識していた直也も、父が現役を退いた年齢に自身が近づくにつれ、体操に対する想いに変化が生まれてきた。

「技を究めたい、大きな大会で勝ちたいといった気持ちは今もあります。でも、中心にあるのは『体操のすべてを知りたい』という想いかもしれません。技術面、精神面のすべて。それはもう神の領域ですね。だからゴールはないんです」

'08年北京大会の出場を逃した直也は、翌年から光男の知人を辿り、オーストラリアに渡った。日豪両国を拠点として競技生活を続けながら、現在はオーストラリア代表としてオリンピック出場を目指している。国籍変更など、諸々の手続きがすべてクリアになったわけではない。しかし、「親として協力できることはいくらでもやってあげたい」という光男の理解もあり、塚原家の側に大きな障壁はない。

一方の光男は現在、日本オリンピック委員会の選手強化副本部長として、競技の枠を超えた形で日本代表選手をサポートする任に就いた。

金メダルが確定した瞬間、直也はチームメイトとともに喜びを爆発させ、「夢のよう。現実離れした感覚」に浸っていた。しかし、監督である光男とは熱い抱擁をするでも、言葉をかわすでもなかった。親子で喜ぶことの照れくささもあったのだろう。一度、がっちりと握手をしただけだった。直也は「嬉しい半面、戸惑いもある

日本国内で唯一、2代でオリンピックの金メダリストとなった塚原親子の挑戦は、これからも果てしなく続いていく。

## Impression

■カメラ:Nikon D3s ■レンズ:NIKKOR 400mm F2.8G VR  
■撮影モード:マニュアル 1/800 F2.8 ISO2500  
■WB:3850K  
■メディア:サンディスク エクストリーム プロ CFカード



サンディスク  
エクストリーム プロ  
コンパクトフラッシュ カード



## 《サンディスク エクストリーム プロ CFカードインプレッション》 抜群の書き込み速度は表現の幅を広げる!

竹内里摩子

8月中旬、6日間にわたる「全日本ジュニア体操競技選手権」で撮影したデータは計500GB強。

他のフォトグラファーはその量の多さを驚いていましたが、私にしてみればいつものこと。大会の正式記録として現場に入ると、出場選手全員を撮影することが基本となるので、午前中から始まり夕方まで続く選手たちの演技にカメラを向け続けます。演技時間が一人当たり数十秒から90秒以内と短いながらも、選手がカメラから遠ざかることがない体操撮影ゆえ、シャッターボタンから指を離すことは稀です。私自身の休息や食事のタイミングも厄介ですが、フィルムカメラの時代も同じ撮影スタイルだったのでフィルムチェンジのことが演技の最中、常に頭の隅に存在していました。個々の技を逃さないためににはフィルムの残数をいつも計算しながら、不必要にシャッターを押さないよう心がけていました。

デジタルカメラになった当初、その問題が解決すると思いきや、メモリー容量やカメラのバッファメモリーの少なさから、相容れない弊害を感じ、結局はフィルム時代と同じく撮影可能枚数とシャッターレスポンスを気にしながらの撮影が続きました。しかし、デジタルカメラが持つ先進性、例えば室内競技ゆえの超高感度域での再現には助けられ、その後の高感度の進化や連写時のバッファメモリーの増加には大きな有益性を見出しています。そして今、最も頼もしいのはフィルムに取って代わったメモリーカード

より信頼度が高く、そして切れ目なく続く演技に対応できる高速書き込み可能な大容量のメディアが必要となります。

先出の「全日本ジュニア体操競技選手権」で90MB/sという驚異的なスピードを誇る、サンディスクの「エクストリーム・プロ・コンパクトフラッシュカード」を使いました。これまで持っていました高速対応を謳うCFカードに比べ、明らかにバッファ開放が速く、書き込みの速さを実感すると同時に、ストレスなく撮影ができます。演技だけでなく、合間のさりげないシーンにも積極的にカメラを向ける余裕が生まれ、結果的に一層、表現の幅が広がった気がしています。

年々進化するテクノロジーの裏にはアイディアの具現性が詰まっています。新しいものを手に入れる喜びを感じ、期待感が膨らんだ瞬間がありました。

撮影／山田高央



竹内里摩子【たけうち りまこ】

1962年東京生まれ。1981年、写真学校から実践の場を求めてフォート・キシモトに入社。数々のスポーツシーンの撮影を経験し、1985年に(有)インスを立ち上げ、現在に至る。やり直しの利かないスポーツ撮影の緊張感と選手から放たれるエネルギーに魅了され、特に体操・新体操を中心に世界選手権・ワールドカップ・オリンピック等を撮影。今春、30年にわたる撮影をまとめた新体操写真集「終わらなきヒロイイ」を発行。その継続性を讃えられ「世界体操東京2011」に於いて、国際体操連盟(FIG)から表彰される。

カメラよ、私について来れるか。

[信頼性]

インテリジェントなデータ管理を可能にする、業界最高水準のエラー訂正コード。

[レジスタンス]

RTVシリコンコーティングを施すことでの湿気や湿度から保護。

[667Xのスピード]

667倍速(100MB/秒)\*1という高速のデータ書込み速度を実現し、シャッター間の待ち時間とPCへのデータ転送時間を最少化。

[耐久性]

衝撃、振動、気温、湿度など過酷なテストをクリアし、極限の状況下でも正確に動作するよう設計。

[長寿命]

最適化されたウェアレーベリングにより、データの保全とカードの寿命を最大化。

[テクノロジー]

サンディスク独自のコントローラにより、UDMA7の性能を最大限に発揮。

[大容量]

128GBの大容量で、高速連写による膨大なRAW+JPEG画像も、ハイデフィニション動画も余裕で保存。

[絶対の自信]

厳しいストレステストをクリアした無期限保証\*2付き。



超高速の大容量メモリーカード、最大100MB/秒のスピードを実現。

さらなる進化を遂げた、サンディスクのコンパクトフラッシュ。



サンディスク エクストリーム® プロ™ コンパクトフラッシュ® カードは、独自の特許技術「サンディスク パワー コア™ コントローラ」を搭載。これによりカード内の画像データ処理速度が飛躍的に向上し、最大667倍速(100MB/秒)の書込みスピードという優れたパフォーマンスと信頼性を実現しました。また厳しいストレステストをパスしており、極限の状況下での耐久性を保証。さらに128GBの大容量は、あなたがどれだけシャッターを切っても、大切な瞬間を余裕で記録します。

フラッシュメモリーカード世界\*・国内\*\*シェアNo.1。サンディスクだからできた、究極の1枚。

[www.sandisk.co.jp](http://www.sandisk.co.jp)

サンディスク

検索



\* 2010年Gartner調べ (Gartner Dataquest No. GO0211697 03/25/2011)。\*\* GfK Japan調べ(国内の有力家電量販店販売実績集計/2010年)。BCNランキング(2010年1月~12月)。\* SanDisk、SanDiskロゴ、及びSanDisk Extreme Pro、パワーコアは、米国及びその他の国におけるSanDisk Corporationの商標または登録商標です。その他の商標も特定の目的のために使用されるものであり、各権利者によって商標登録されている可能性があります。\*1 最大書込み速度の数字はサンディスク社内テストの結果に基づきます。読み取り速度はこれより速くなります。ホスト機器によって読み取り/書き込みの速度は異なる場合があります。1メガバイト(MB)=100万バイト、1ギガバイト(GB)=10億バイト。1倍速=150KB/秒。記載された容量の一部はフォーマット及びその他の機能に使用されるため、すべての容量をデータ保存のために使用することはできません。\*2 保証内容に基づきます。